加曽利西貝塚の調査

― 昭和５３年・平成元年の立合調査資料から ―

田　中　英　世

1　はじめに

加曽利貝塚の西側平坦部に点在貝塚が存在することは早くから知られていたが、昭和45年以降の東傾斜面における遺跡限界確認調査により貝層の外側から遺構群が確認されてからは俄かに注目されるようになった。近年、周辺は都市化が進み、それに伴なう立合調査や確認調査が多く行われているが、その具体的資料は未報告である。ここでは筆者が関係した立合調査により検出された遺構群を中心として報告したい。

2　加曽利西貝塚の調査略史

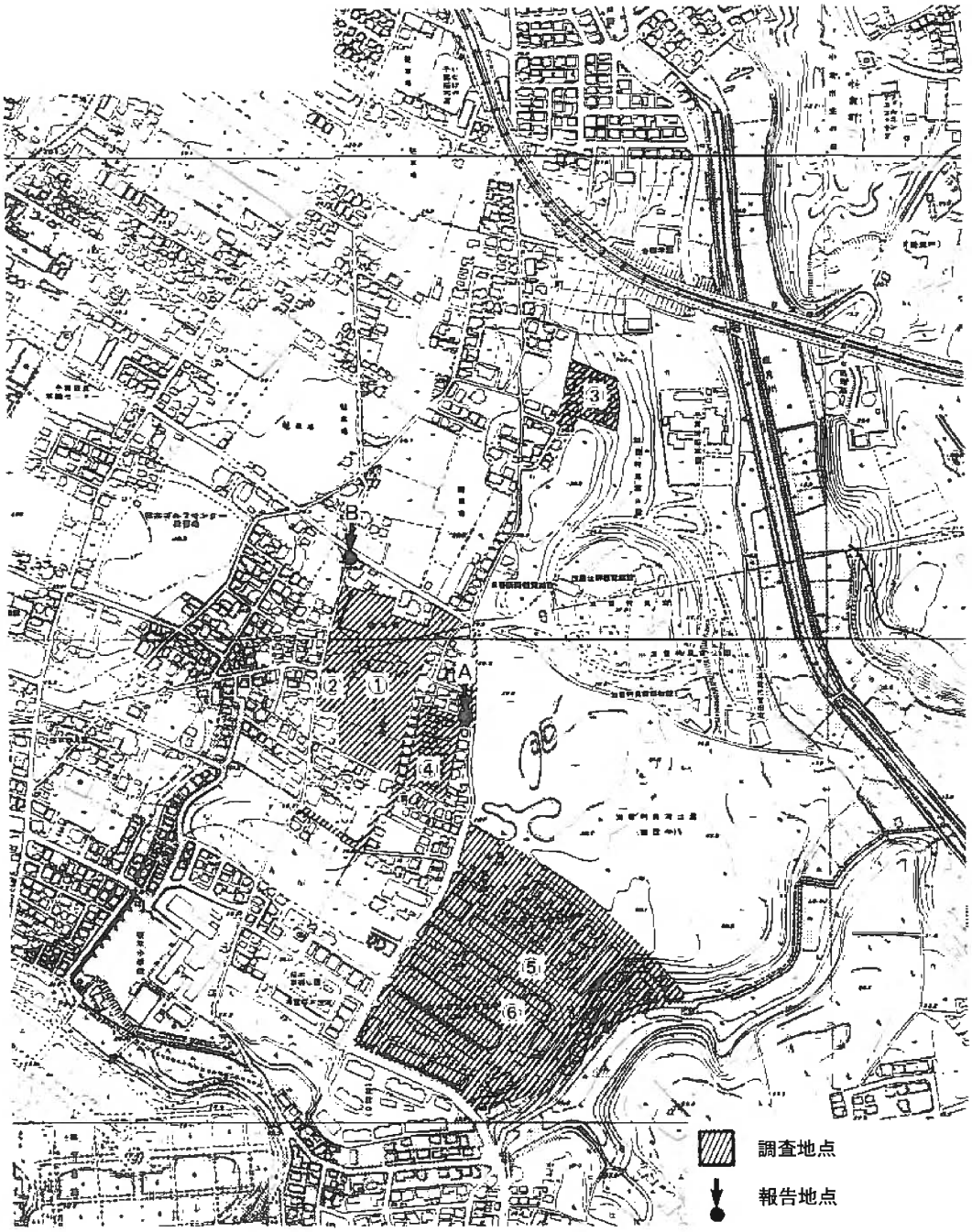
加曽利貝塚を載せる台地は東側を坂月川による支谷に切られ、南側も京願台支谷と呼称される小支谷が湾入し、桜木小学校付近で北に向かい西貝塚の西側に到達する。かつてはこの桜木ゴルフセンター周辺に大きな池があり水源地が存在したことが指摘されている（千葉市教育委員会　1986，第２図下左）。加曽利西貝塚の存在は、昭和49年に刊行された『千葉市史』の中で縄文時代中期の土器を伴なう点在貝塚として指摘され（後藤　1974）、武田宗久氏はこれを加曽利西貝塚と命名し６ケ所以上の点在貝塚からなるとした（武田　1987）。時期は縄文時代中期とする説（後藤　1987）と後期の堀之内Ｉ式期を中心とする説（庄司　1987・武田　1990）の両者が認められる。加曽利西貝塚の調査は都市化に伴ない近年数を増しており、「加曽利貝塚隣接地遺跡」として確認調査と数度に亘る立合調査が行なわれているが、主な調査は下記のものである（第１図・註１・千葉市教育委員会　1984）。

・1980年（昭和55年）12月23日～12月26日　千葉市若葉区桜木町 273他（確認調査）
　100／1,000　縄文時代中期住居跡８軒　時期不明溝３条　加曽利Ｅ式土器片
　（千葉県　1982）

・1983年（昭和58年）６月３日～７月21日　千葉市若葉区桜木町136-3 他　（確認調査）
　200／1,960　遺構なし　加曽利Ｂ式土器片１箱　（千葉県　1985）

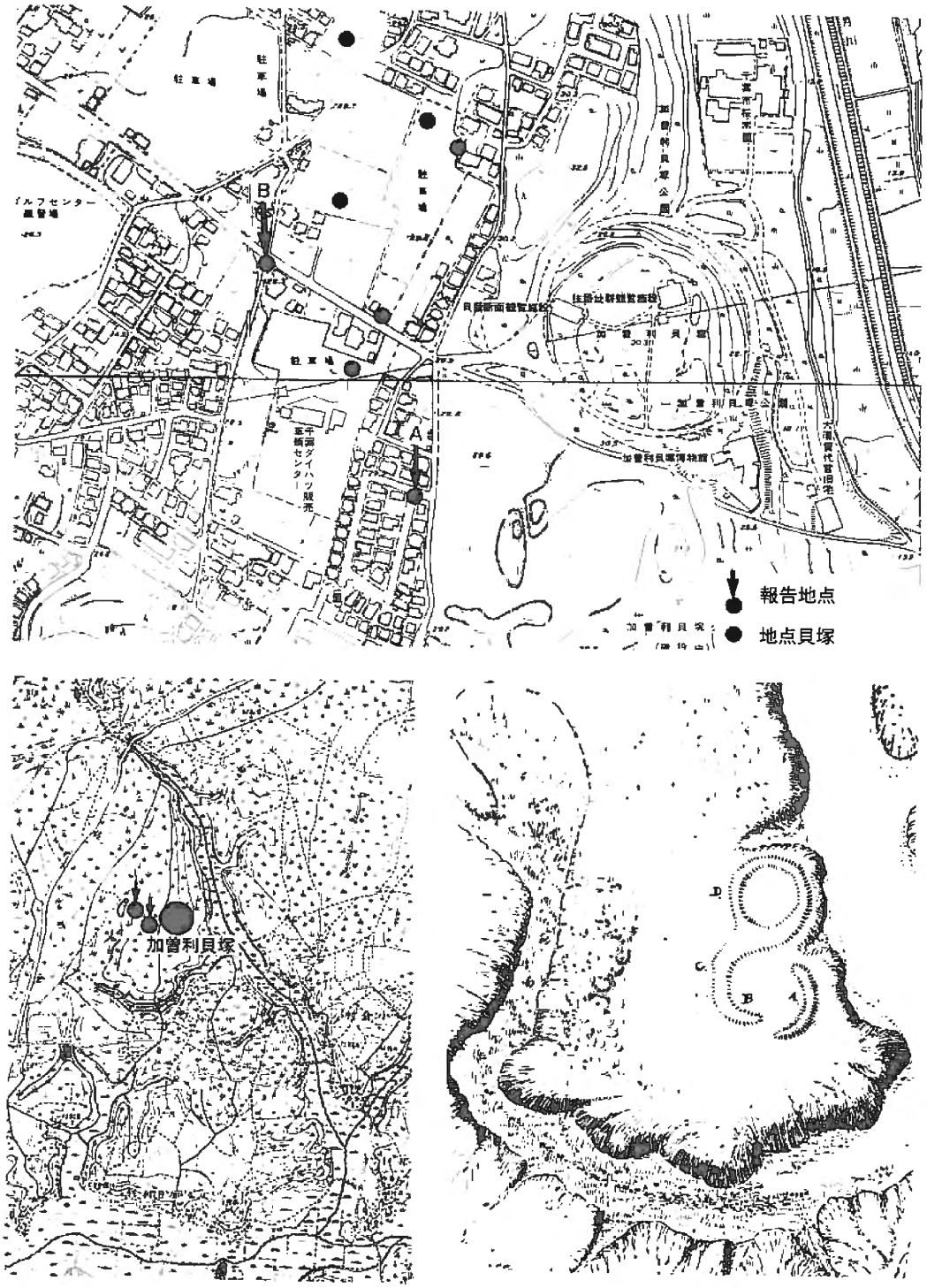
・1985年（昭和60年）６月17日～６月29日　千葉市若葉区桜木町283-1 他　（確認調査）
　308／3,120　遺構なし　加曽利Ｅ式・加曽利Ｂ式土器片、石斧　（千葉県　1987）

以上３回の確認調査により、加曽利西貝塚が加曽利ＥⅢ式期からＥⅣ式期にかけての小規模な遺構内投棄の貝塚により構成されることが判明している（青沼　1990）が、詳細な資料は公表



A　昭和53年立合調査（市教育委員会）
B　平成元年立合調査（市教育委員会）
①　昭和55年確認調査（市教育委員会）
②　昭和58年確認調査（市教育委員会）
③　昭和60年確認調査（市教育委員会）
④　昭和52年立合調査（市教育委員会）
⑤　昭和59年本調査（県文化財センター）
⑥　昭和61年確認調査（市文化財調査協会）

第１図　加曽利貝塚周辺地形図



第２図　調査地点周辺図および旧地形図

（下左：陸軍地方迅速図改変、下右：大山　1937）

されていない。

3　検出された遺構

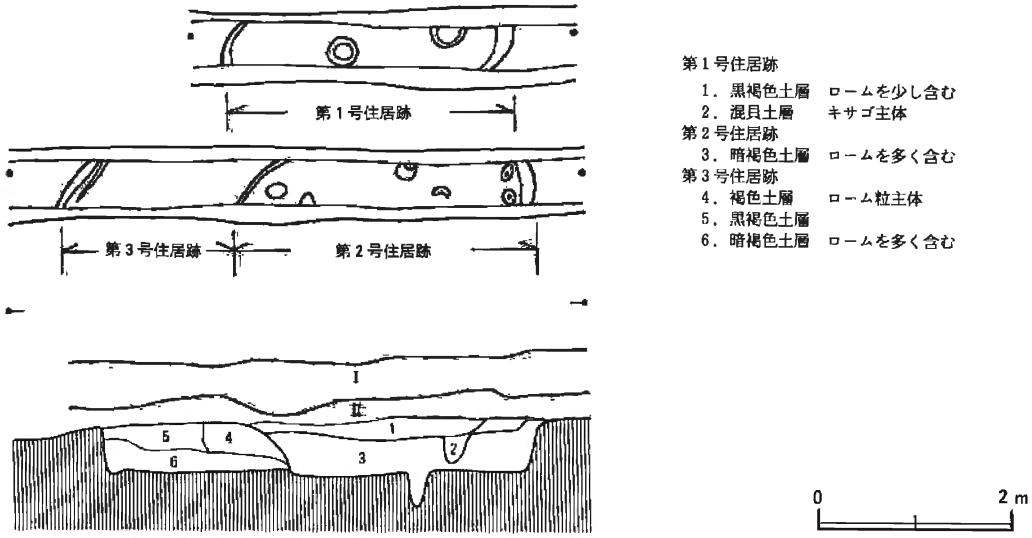
(1) ガス管埋設工事に伴なう立合調査（昭和53年４月８日～５月３日）

千葉市若葉区桜木町 260他　縄文時代中期（加曽利Ｅ式期）住居跡３軒　近世溝５条

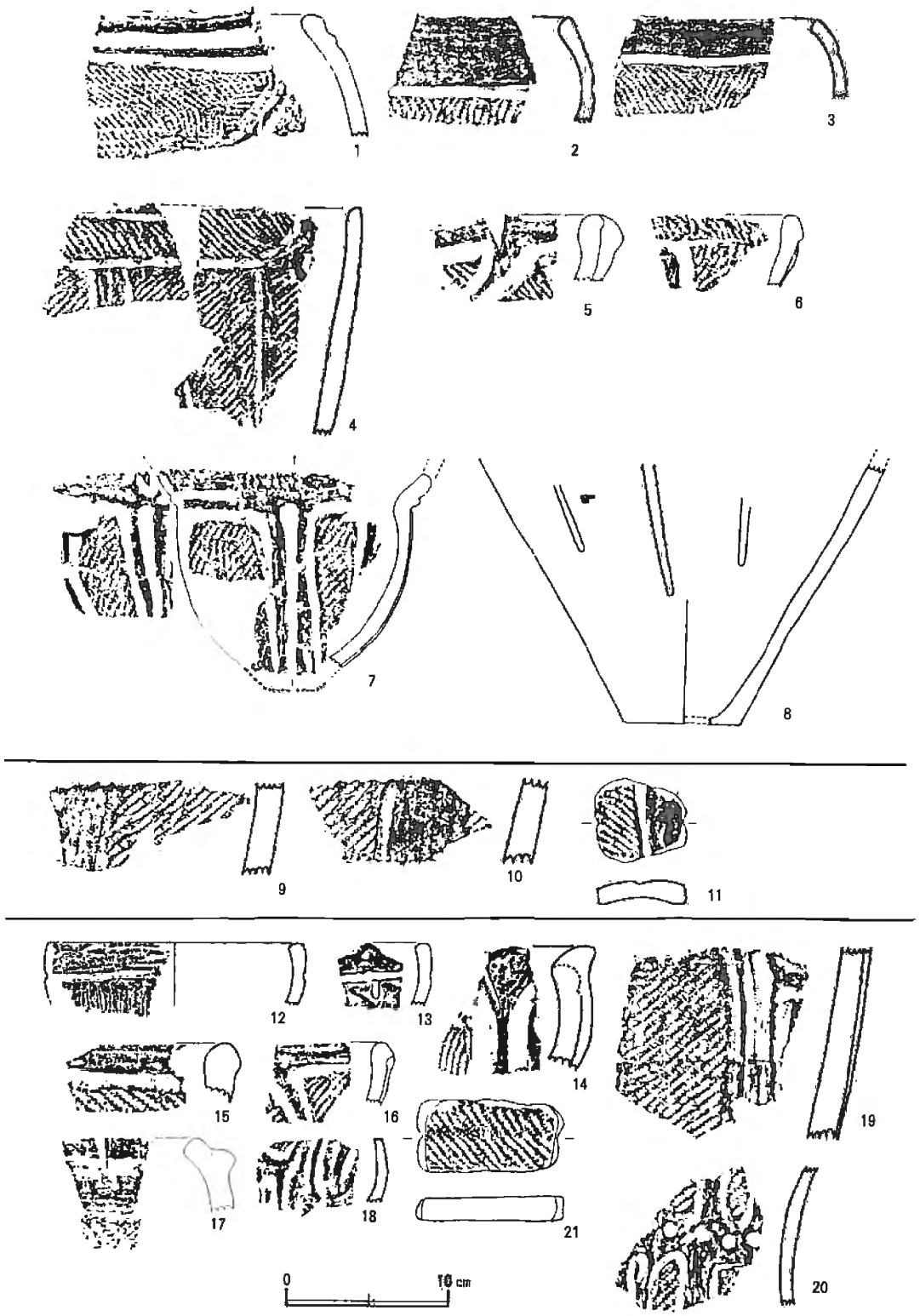
調査区は加曽利南貝塚の西側道路部分で、昭和55年調査地点の東側隣接地である。基本層序はⅠ層（表土層－10～20㎝）・Ⅱ層（黒褐色土層－20～30㎝）・Ⅲ層（暗褐色土層－20～30㎝）・Ⅳ層（ソフトローム層）で、Ⅱ層から土師器・加曽利Ｅ式土器が、Ⅲ層からは加曽利Ｅ式土器が出土し、南貝塚の昭和61年調査のＡ地区Ｃトレンチの層序とほぼ一致する（千葉市教育委員会　1987)。住居跡は南貝塚に近接した地点から３軒重複して検出されたが、工区幅（0.6ｍ）部分のみの調査で規模・形状等は不確定である。また公園入口から南下する道路下に遺構の存在が予想されたが、道路に沿って近世の溝が走っているため検出できなかった。

〈第１号住居跡〉

第２号住居跡の覆土を踏み固めて貼床としたもので、直径約３ｍの円形を呈する。掘り込みは約20㎝、覆土内及び床面直上からは加曽利ＥⅢ式土器を主体とした土器が多く出土しており、南側と東側の床面上から深鉢形土器の下半部（第４図７・８）が出土した。柱穴は２本検出され、１本からはハマグリ・キサゴ・ウミニナで構成される貝ブロックが検出された。遺物としては多くの加曽利Ｅ式土器が出土した。第４図１はゆるやかな波状口縁を呈し口縁に沿って２条の深い沈線を施しており、体部には微隆起文がみられる。２・３は平縁の口縁で、無文帯の口縁部下に１状の深い沈線を施した後にＲＬの羽状縄文が施されている。４は平縁の口縁で、



第３図　第１号住居跡～第３号住居跡実測図



第４図　第１号住居跡（１～８）・第２号住居跡（９～11）・遺構外（12～21）出土遺物

横走するＲＬの縄文を施した後に浅い沈線により枠状文をつくり、胴部は縦走する縄文を施した後に縦の沈線による磨消帯を作出している。６は平縁の口縁部に横走するＲＬの縄文を施文した後に縦走のＲＬの縄文を施して羽状縄文を形成し、「∩」字状の磨消縄文が口縁部まで作出される。７は小型深鉢形土器の下半部で、太い隆線文と沈線文で「∩」字状の文様を形成し中に縦走の縄文を施している。８は器面の粗い深鉢形土器の下半部で、文様は縦の沈線のみで部分的に縄文がみられる。以上の土器のうち１・３・４・７・８が床面上より出土し、６がピット１から出土している。

〈第２号住居跡〉

直径約３ｍの円形を呈すると思われ、掘り込みは58㎝を測る。ロームを堅固に踏み固めた直床を有し西側に弱い焼成を受けた部分がみられる。柱穴は２本認められた。覆土内からは加曽利Ｅ式土器が若干出土したが、床面上からの出土は少ない。９・10はいずれも磨消縄文を有する胴部破片で、11は無文帯の口縁部を持つ土器片錘である。

〈第３号住居跡〉

掘り込みは約53㎝、形状は円形を呈するが東側を第２号住居跡によって切られている。床面はロームを堅固に踏み固めた直床で幅10㎝の周溝がみられる。柱穴は検出されず覆土内からは加曽利Ｅ式土器が少量出土したのみである。なお西側の覆土内からウミニナ・ハマグリ・キサゴで構成される小貝ブロックが検出された。遺物は朱塗りの土器片が１片出土している。

〈遺構外出土遺物〉

縄文時代の包含層が検出されたのは３軒の住居跡周辺のみで、他の部分は削平されたり溝により壊されており検出されなかった。12は粗い櫛目文を有し、14は太い隆線と沈線により渦巻文を形づくる。18は細い隆起線文によるもの。20は胴部中央部の破片で、沈線によるＵ字文内に横走のＲＬの縄文を施しており、上半部と下半部の境には円い列点文が施され、下半部には蕨手文の一部が認められる。21は土器片錘である。

以上が昭和53年の立合調査の概略であるが、第１号住居跡が加曽利ＥⅡ式期～ＥⅢ式期、第２号住居跡と第３号住居跡が加曽利ＥⅡ式期に比定される。

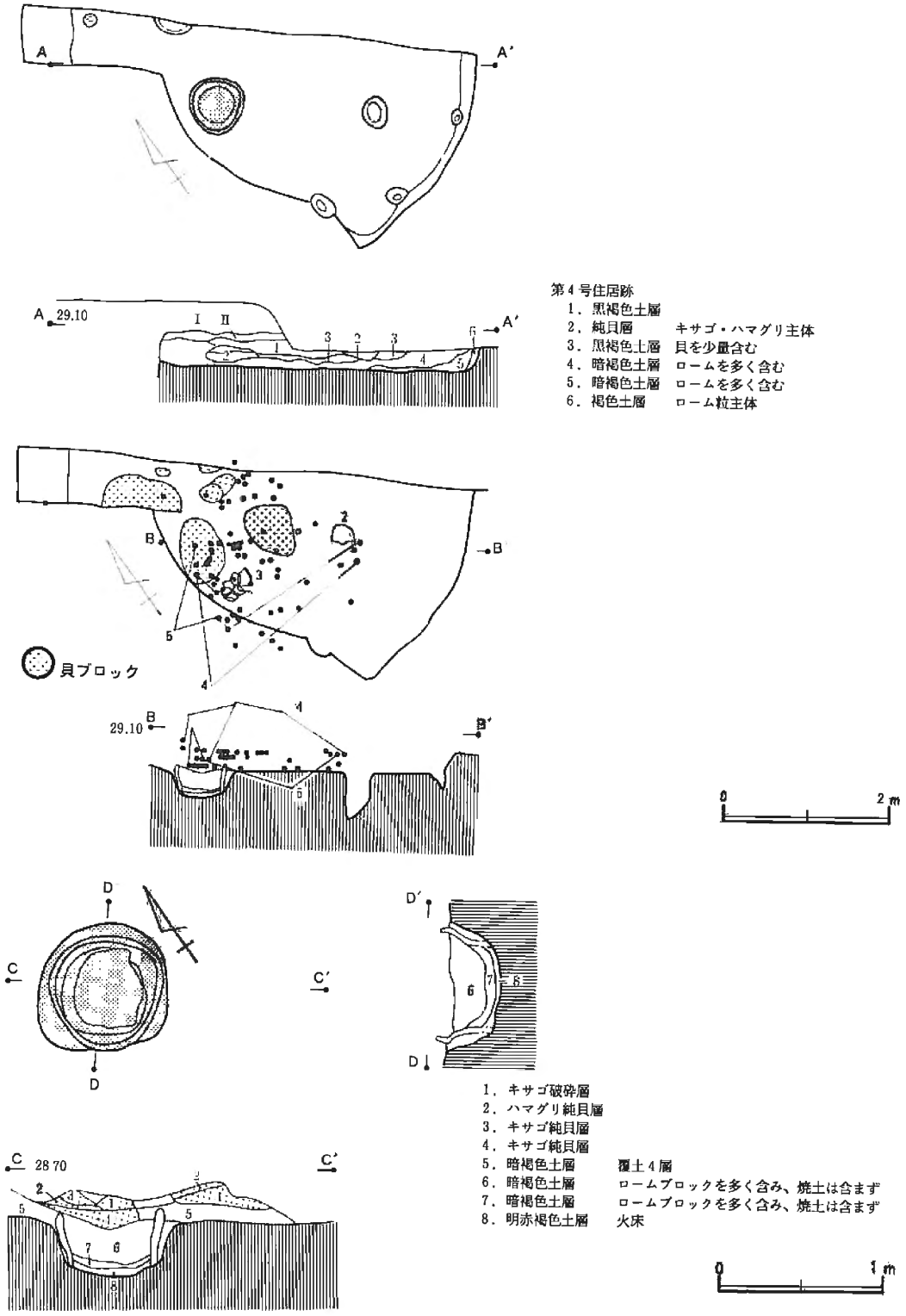
(2) 排水溝設置に伴なう立合調査（平成元年２月１日～２月28日）

千葉市若葉区桜木町238 他　縄文時代中期（加曽利Ｅ式期）後期（称名寺式期）住居跡２軒

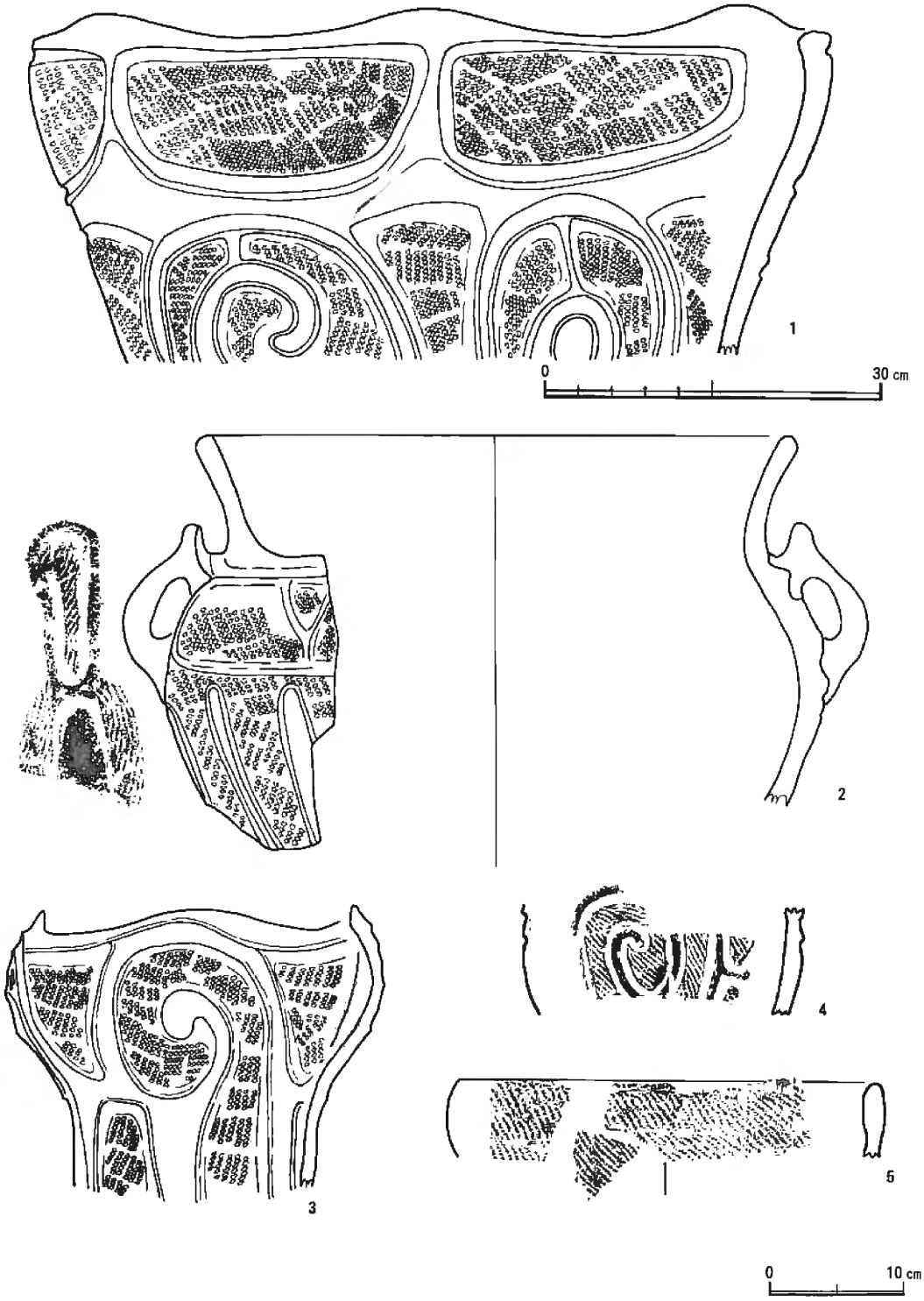
調査区は国道51号線から加曽利貝塚公園に通じる道路の南側地点で、昭和55年調査地点の北側隣接地、京願台支谷が桜木小学校から北上してきた東側の地点にあたる。調査区は工区幅（0.8ｍ）と集水桝地点の30㎡である。

〈第４号住居跡〉（註２）

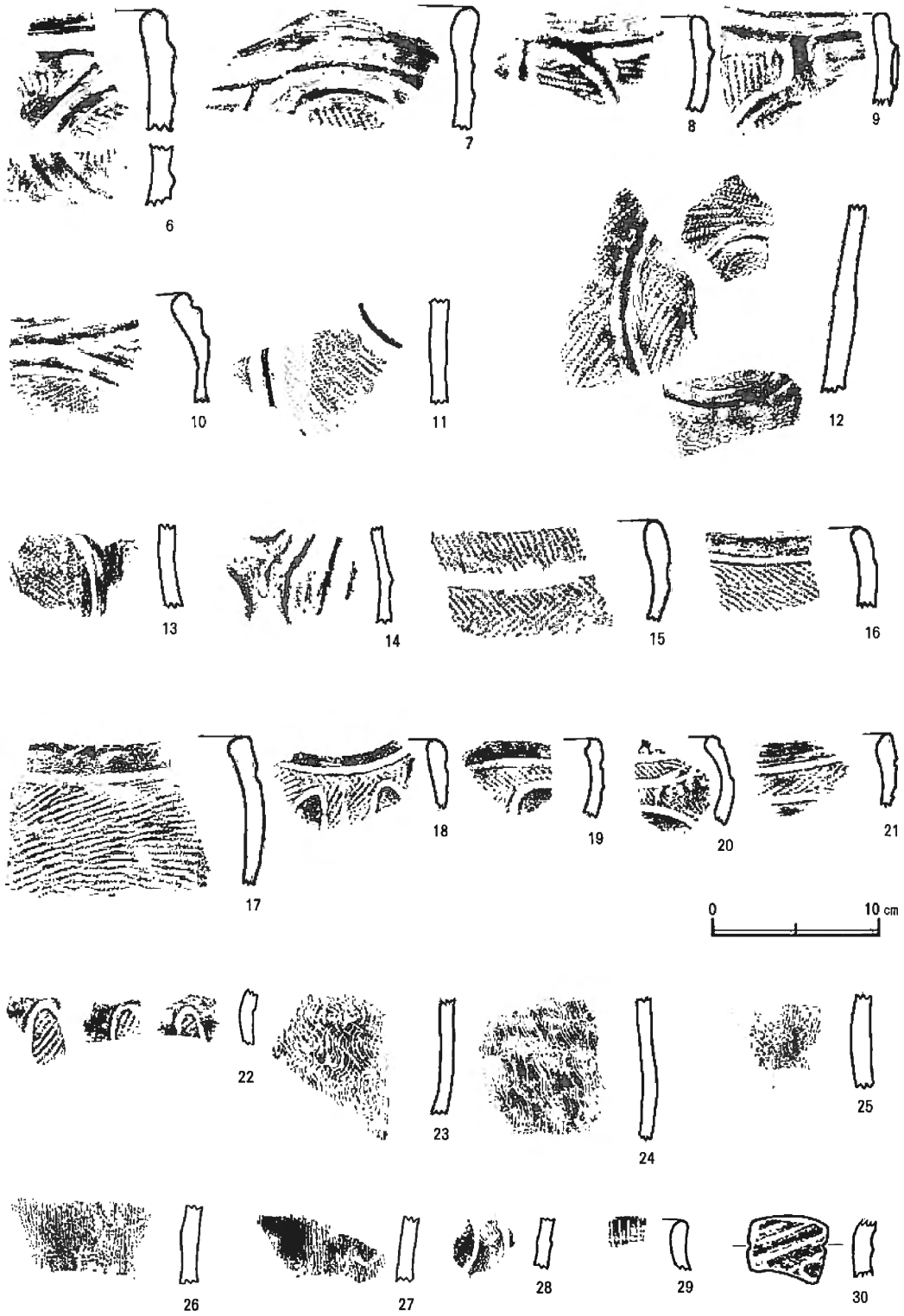
直径約５ｍの円形を呈すると思われ、その1／3 を調査した。掘り込みは約30㎝で、壁際には壁柱穴が認められ、直径40㎝、深さ50㎝の主柱穴が２本検出された。中心より西側に直径73



第5図　第4号住居跡実測図・遺物出土状況図



第６図　第４号住居跡出土遺物（１）

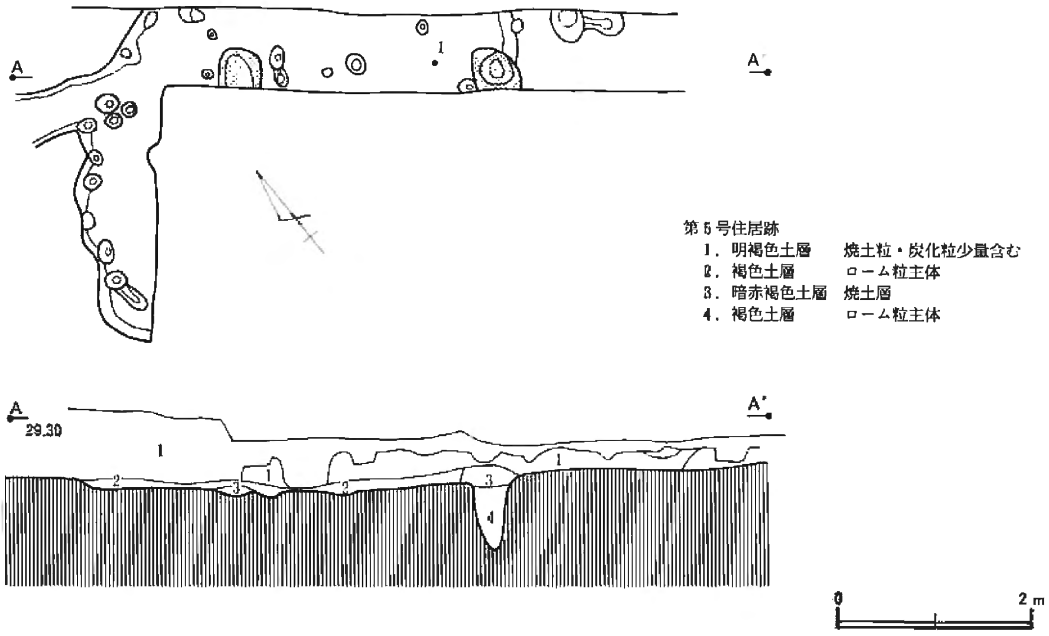


第７図　第４号住居跡出土遺物（２）

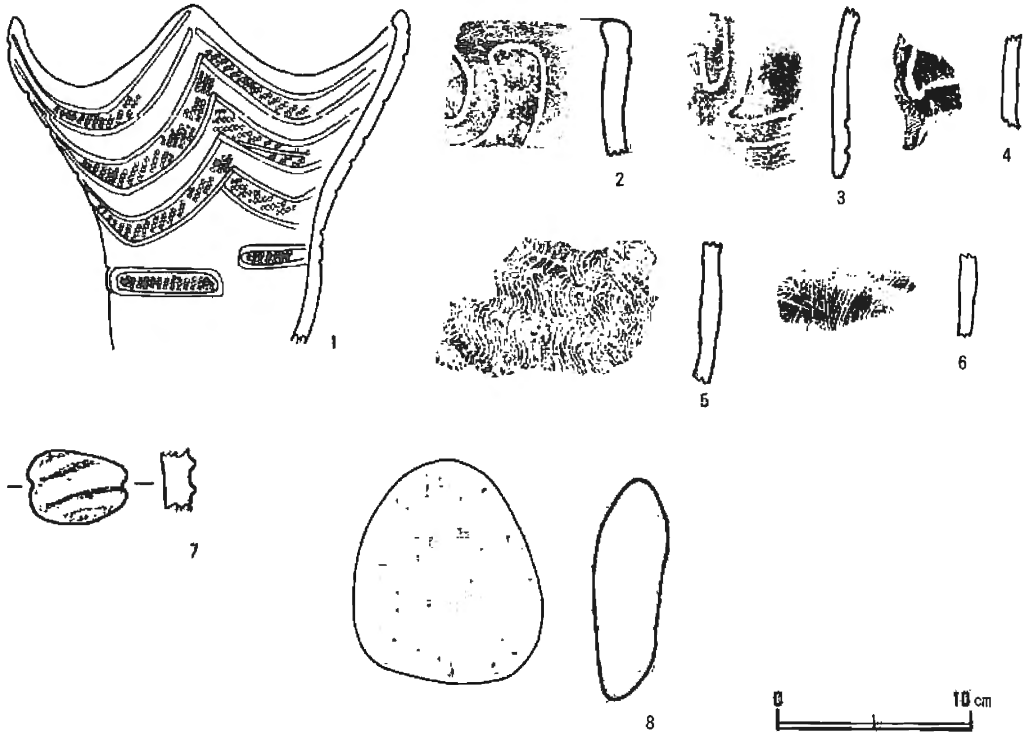
cm・高さ32cmの大型深鉢形土器の胴上半部を埋め込んで炉体土器とした炉が検出された。炉内の覆土は暗褐色土により構成され、底面付近に灰層が認められるのみで、焼土が抜かれていた痕跡が認められる。覆土内からはハマグリ・イボキサゴを主体として、ダンベイキサゴ・アサリ・カキを含む6個の貝ブロックが検出された他、多くの土器が出土した。第6図1は炉体土器として使用されたもので、口縁部文様帯は楕円文を形成し、胴部文様は指頭による撫でで形成された微隆起線文により渦巻文を構成する。3・4・6～13は1の胴部文様と同じ文様構成をとるもので、4を除いてはいずれも微隆起線によるものである。14は渦巻文内に縄文が施文されない例である。15～17は、口縁部に一条の太い沈線を有するもの。18～22は胴部上半に「∩」字状の磨消文様帯を有するもので、20は口縁部の磨消縄文下に刺突文を施している。2は大型の両耳壺で胴部上半に微隆起線文と浅い断面V字状の沈線により楕円文が構成され、胴部下半に「∩」字状の磨消縄文を有し把手上にも舌状の磨消縄文を施している。23～27は櫛状工具により条線文を施した土器である。28は称名寺式土器で、29は前期後半と思われる土器で30は同一個体の土器片錘である。2・3・7・19・22が床面直上層から出土し、4が床面直上のキサゴ破砕層から出土している。これらの土器はほぼ加曽利EⅢ式土器に比定される。

〈第5号住居跡〉

確認時は壁際の焼土により2軒の重複として捉えたが、精査の結果1軒とした。直径4.6mの円形を呈し、掘り込みは約20cmである。覆土は明褐色土層で構成される。壁柱穴が巡り、東側壁際と西側から掘り込みを伴う焼土が検出されており、壁際焼土の西側から第9図1の称名



第8図　第5号住居跡実測図



第９図　第５号住居跡出土遺物

寺式土器が倒立の状態で出土した。また東側の壁外ピットは入口施設に関係するものと思われる。出土遺物は少ない。第９図１は底部を欠いた称名寺式土器で、胴部上半は波状口縁に沿って沈線で区画された６帯の区画内に交互に縄文を施しており、胴部中央には沈線による枠状文が形成される。２～４はＪ字状の磨消縄文を有するもので、５・６は櫛状工具による波状文を施している。７は加曽利Ｅ式土器の土器片錘である。８は凹石で、他には軽石製浮子が１点出土している。１～６は称名寺式土器の古段階に位置付けられる。

４　加曽利西貝塚出土の遺物について

(1) 第４号住居跡出土遺物について

前述したように第４号住居跡は全体の1／3•の調査という悪条件ながら良好な資料が検出された。これらは第１類（微隆起線文による渦巻文を構成する土器)、第２類（口縁部直下に一条の太い沈線を施す土器)、第３類（胴部に「Ω」字状の磨消縄文を有する土器)、第４類（櫛状工具による条線を施す土器）に分類される。１類は梶山タイプ、３類は吉井城山タイプと呼称されているもので、第４号住居跡では第１類の出土が卓越している。第６図１の炉体土器の類例は千葉県草刈遺跡Ｂ地区716 号住居跡の土器囲い炉を構成した土器や小池麻生遺跡出土土

器に、3は曽谷貝塚第7地点2号住居跡出土土器に類例が求められる。平成元年度に実施された加曽利南貝塚整備事業に伴なって行なわれた東傾斜面の調査でも17D遺構（住居跡）から第1類の土器が出土しており、口縁下に微隆起線文を施し以下全面に縄文を施した土器と口縁部から全面縄文を施した土器が伴出している（佐藤　1991)。これらの土器群は、2の両耳壺の土器と合わせて埼玉県島之上遺跡第4号住居跡出土例の段階に位置付けられ、加曽利EⅢ式土器古段階における良好な一括資料として位置付けられる。近年、加納実氏は第1類を「意匠充填系土器群」第3類を「横位連携弧線文系土器群」として資料集成し詳細な分析を加えている（加納　1989・1991・1992)。

(2) 第5号住居跡出土遺物について

称名寺式土器の研究は昭和63年に行なわれた「称名寺式土器に関する交流会」の記録が刊行されて以来活発に行われている。第9図1は石井寛氏によるA群土器、2・3はB群土器にあたる（石井　1992)。1は波状口縁と磨消縄文帯という整った文様帯を有する土器ながら称名寺式土器の中では類例が少なく、ここでは沈線の描出方法等により第3段階とされた榎土B遺跡出土例の系列として理解しておく。今回報告した称名寺式期の住居跡は、加曽利貝塚では3軒目となるが、前2軒はいずれも南貝塚内側から検出されている。

5　まとめ

「…南・北両貝塚、西貝塚、桜木団地貝塚、南・北両貝塚の東側平坦部～傾斜部を含めたすべての遺跡は互に密接不可分離な有機的関係にある加曽利貝塚人の集落の単位と見なければならない。その範囲は東西 600メートル、南北 700メートルに及ぶ小字京願台と呼ばれる広大な舌状台地のほぼ全域に相当する。」（武田　1987)

加曽利西貝塚において調査された遺構は、加曽利EⅡ式期～EⅢ式期の住居跡4軒、称名寺式期の住居跡1軒で、昭和55年の確認調査で確認された中期とされた8軒の住居跡もほぼ同期のものと思われる。また加曽利貝塚博物館により昭和61年から行われている物理探査と試掘調査により南貝塚西側にも地点貝塚が多く確認されており、A地点Cトレンチからは投棄貝層を伴なう加曽利EⅣ式期の柄鏡型住居跡1軒と埋甕1基が検出されている。以上のことから加曽利西貝塚は加曽利E式期後半を主体とする集落遺跡とすることができる。この時期は北貝塚と南貝塚の貝層形成期の空白期で、南貝塚東傾斜面にも地点貝塚を伴なう住居跡群が検出されており、貝塚主体からはずれて台地全面に遺構群が展開することが指摘されている（青沼　1990)。また、北貝塚の北方 250mの京願台遺跡では千葉都市モノレール建設に伴ない調査が行われ、阿玉台式期～加曽利EⅢ式期の住居跡や土壙が検出されているが（山口　1986)、この間には昭和58年に調査されて遺構が認められない地点や湧水地点（桜木園内）が存在する。南貝塚南側でも桜木団地建設に伴なう調査により阿玉台式期と加曽利EⅣ式期の住居跡1軒が検出され

ている（古内　1986，千葉市文化財調査協会　1990）他、平成元年度に実施された整備事業に伴なう確認調査でも加曽利ＥⅣ式期の住居跡と堀之内式期の土壙が検出されている。西貝塚においては表面採集で堀之内式土器や加曽利Ｂ式の異形土器が採集されている（田中　1987）ことからも後期前半以降の遺構が存在する可能性は充分に考えられる。

今回報告した加曽利西貝塚のような大型貝塚の外縁部の調査例としては、市川市曽谷貝塚が掲げられる。曽谷貝塚周辺で近年の宅地化による小規模な発掘調査が断続的に行なわれており、平成２年現在で31地点を数える。それによれば貝層外縁部にも遺構群が広く展開しているが、その主体をなすものは加曽利ＥⅢ式期からＥⅣ式期の遺構群で、貝層形成に直接係わる遺構の存在（堀之内Ⅱ式期～加曽利ＢⅡ式期）は少ないとされていたが（花輪　1987）、昭和62年に調査された第20地点からは加曽利ＢⅢ式期２軒、曽谷式期１軒、安行Ⅰ式期１軒の住居跡が検出され、４個体の異形台付土器が出土しており注目される（堀越　1988）他、平成２年度に調査された第27地点からは堀之内Ⅰ式期の地点貝塚が検出されており、遺構群が曽谷貝塚を載せた台地全域に展開することが予想される（註３）。

加曽利貝塚周辺では、「加曽利貝塚隣接地遺跡」として多くの立合調査や確認調査が行なわれている。今回はそれら個々の資料にあたることはできなかった。また加曽利南貝塚東傾斜面において昭和45年から実施されてきた遺跡限界確認調査においても、遺構と遺物の関係が明示されていない部分が多く（註４）、加曽利貝塚を中心とした集落論の立ち遅れとなっている。今後は、これらの資料を再検討した上で、西貝塚の遺構群との関係を見ていきたい。

以上が加曽利西貝塚の調査の概略である。先の武田宗久氏の指摘のように、加曽利貝塚に関係する遺構群が京願台の台地全域に展開することが確実となった。今回の報告が加曽利貝塚を捉え直す一資料となれば幸いである。

（(財）千葉市文化財調査協会）

〈註〉

1　加曽利西貝塚の存在は昭和49年以前に既に知られており、昭和47年に配布された調査概報の加曽利貝塚の全体図に４地点の地点貝塚が示されている（加曽利貝塚調査団　1972）。当時は加曽利貝塚西平坦部と呼称していた。また、昭和58年に刊行された『千葉県の貝塚』（千葉県教育委員会　1983）の測量図にも４地点の地点貝塚が記載されている。「加曽利貝塚隣接地遺跡」としての調査は西貝塚のみではなく、北貝塚や南貝塚周辺を含めた広範囲に亘って行なわれており、代表的なものを第１図に示した。

2　平成元年の遺構番号は発表に際し変更し、通し番号とした。第４号住居跡は調査時NoＡ－02、第５号住居跡は調査時NoＡ－01であり、遺物には＜カソリ西95＞としてナンバーリングしている。

3　これらの調査については「これらは、いわばスプロール化に伴なう虫食い調査ともいえるが、曽谷貝塚の周辺はどのようになっているのか、とりわけ集落の限界はどこかといった問題に光明を与えようとしている。」との意義付けがなされ、「これまでの調査結果を総合すると、曽谷貝塚主体部の西方には、加曽利ＥⅢ・Ⅳ・称名寺期の集落と墓が展開し、曽谷貝塚との関係が問われるのに対し、南方には、茅山期の炉穴や前期の住居が僅かに散在し、少なくとも中・後期の曽谷貝塚との関係はない。曽谷貝塚主体部を含め、周辺は前期、とりわけ黒浜期の住居が散開し、集中した集落を形成していない。」（堀越他　1986）との中間報告がなされている。

4　報告（後藤他　1981a ・1981b ）においては、遺構番号と遺物の出土遺構番号との混乱がみられ、個々の遺物の出土遺構が確認できないものがある。

〈引用・参考文献〉

青沼　道文　1990　「千葉市域の縄文中期後半期遺跡の分布と立地」『貝塚博物館紀要』第17号　千葉市立加曽利貝塚博物館

石井　寛　1992　「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第９冊　（財）横浜市ふるさと歴史財団

稲村　晃嗣　1994　「両耳壺ノート」『民族考古』第２号　慶応義塾大学文学部民族考古学研究所

大山　柏　1937　「千葉県千葉郡都村加曽利貝塚調査報告」『史前学雑誌』第９巻第１号

加曽利貝塚調査団　1972　『昭和47年度加曽利貝塚南平坦部遺跡限界確認予備調査概報』

加納　実　1989　「千葉県における加曽利Ｅ式土器後半の様相」『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所

1994　「加曽利ＥⅢ・Ⅳ式土器の系統分析」『貝塚博物館紀要』第21号　千葉市立加曽利貝塚博物館

1995　「下総台地における加曽利ＥⅢ式期の諸問題」『研究紀要』16　（財）千葉県文化財センター

後藤　和民他　1974　「石器時代の遺跡」『千葉市史　原始・古代・中世編』　千葉市史編纂委員会

後藤和民・庄司克　1981a　「昭和45・46年度加曽利貝塚東傾斜面遺跡限界確認調査概報」『貝塚博物館紀要』第６号　千葉市立加曽利貝塚博物館

後藤和民・庄司克　1981b　「昭和47年度加曽利南貝塚南側平坦部第４次遺跡限界確認調査概報」『貝塚博物館紀要』第７号　千葉市立加曽利貝塚博物館

後藤　和民　1987　「加曽利貝塚の整備計画」『加曽利貝塚博物館20年の歩み』　千葉市立加曽利貝塚博物館
笹森　健一　1979　『前畠・島之上・出口・芝山』　埼玉県教育委員会
佐藤　順一　1991　「縄文土器成形技法の一端を示す資料」『貝塚博物館紀要』第18号　千葉市立加曽利貝塚博物館
庄司　克　1987　「加曽利貝塚の調査経過」『加曽利貝塚博物館20年の歩み』　千葉市立加曽利貝塚博物館
高田　博　1986　『千原台ニュータウンー草刈遺跡（Ｂ区）－』（財）千葉県文化財センター
武田　宗久　1987　「加曽利貝塚の保存と博物館開館の経緯」『加曽利貝塚博物館20年の歩み』千葉市立加曽利貝塚博物館
1990　「縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進・海退（３）」『貝塚博物館紀要』第17号　千葉市立加曽利貝塚博物館
田中　英世　1987　「千葉市加曽利貝塚西平坦部採集の遺物について」『貝塚博物館紀要』第14号　千葉市立加曽利貝塚博物館
千葉県教育委員会　1983　『千葉県の貝塚－千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』
千葉県教育庁文化課　1982　『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－昭和55年度－』
1985　『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－昭和58年度－』
1987　『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－昭和60年度－』
千葉市教育委員会　1984　『千葉市埋蔵文化財分布地図＜改訂版＞』
1986　『史跡加曽利南貝塚整備基本設計』
1987　『史跡加曽利南貝塚予備調査概報』
千葉市文化財調査協会　1990　『千葉市文化財調査協会年報２』
花輪宏・斉藤忠昭　1987　『昭和61年度市川東部遺跡群発掘調査報告』　市川市教育委員会
古内　茂　1986　『加曽利貝塚』　（財）千葉県文化財センター
堀越正行・斉藤忠昭　1988　『昭和62年度市川東部遺跡群発掘調査報告』　市川市教育委員会
堀越正行・田中英治他　1991　『平成２年度市川市内遺跡群発掘調査報告』　市川市教育委員会
堀越正行・橋本喜正　1986　『史跡曽谷貝塚保存管理計画書』　市川市教育委員会
山口　典子　1986　「京願台遺跡」『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
横浜市埋蔵文化財センター　1990　「称名寺式土器に関する交流会」『研究集録』第７冊

＜追記＞　大型貝塚の外縁部の調査として千葉市園生貝塚を追加する。園生貝塚では平成元年以降、貝層を載せている台地全体に対する確認調査が行なわれており、貝層の外側に加曽利Ｅ式期後半を中心とする遺構群が多数検出されている。園生貝塚東側に存在する向原貝塚は、加曽利貝塚と加曽利西貝塚の関係を想起させる。

今回報告した加曽利西貝塚の遺物・図面等は加曽利貝塚博物館で保管している。なお今回の報告に際し、遺物の接合・復元及び図版作成等については、宇那谷遺跡調査補助員から多大な協力を頂いた。また両立会調査の担当者であった山本勇・湖口淳一の両氏には多くの御教示を得た。記して感謝申し上げる次第である。